ゼー、ヴイ、ブレーク氏述

諸宗の心髄

259
522

013663−000−1

特16−469

諸宗の心髄

ゼー・ヴィ・ブレーク／著

M42

ABA−0132

諸宗の心髄

ゼー、ヴイ、ブレーク

余は猶太教及び基督教以外なる諸他の宗教の經典を讀みて大に愉快を覺え、精神上道德上に赫々たる光明を受け、心靈上の感化を得たるは毫も恠むべきにあらざるなり。何となれば諸他の國人を導きて天に昇らしむるに足るべき勢力を有する羽翼(經典)より出で豈に獨り余輩のみ天に舉げられざるの理あらんや。寺院、會館、家庭に於て勢力となり、慰藉となり、教訓となりしものは、獨り猶太教と基督教とが有する歴史、教訓、詩歌、律法、訓戒、勸誘、警告のみに限るにあらざるべし、一切諸他の宗教の經典も亦此等の功德を有せしや明らかなる事實にして。一切の宗教は人に命令し、人を靈化し、人生をして神聖に保たしめ、献身以て死に至らしめ、謙遜にして生涯變ずることなき忠誠を保持せしむるに餘ある勢力を有したりき。是を以て余は斷言すべし、假令氣候を異にし、相貌を異にし、種族を別にすとは云へ、他國人に斯くも光明を與へたる神聖なる經典の紙面は潔白純聖なる光明を以て余に照臨するは敢て恠むに足らざるべしと。

明治
42 8 23
内交

然り而して余は他教の經典を讀むに方りて自ら四次の階級を經て進みしことを認めたり。その最始の時期に於ては余は之を讀みて殆ど得る所なく――たゞ所々に余の心に徹し余を動かしたる片句を認めしのみにして全體の上に於ては余は甚だ之を輕視せり。此等の他國人の經典は余に取りては全く異邦人に逢ふが如く、而して余が心情の慣習には頗る新奇に感ぜられ、余の心的經驗と宗教的語調とには適せざりしなり。故に余は自ら表白するが如く甚だ之を輕侮し、又之を翫味するの淺きより忽然として自宗固有の經典に歸り、益々其功德の宏大にして且つ遙かに莊麗なることを自覺せり。

斯くて余が第二の時期は徐々として來れり。これ他教の經典を絶えず反復するより來れるものにして、遂に屢々之を繙くと、或は又一種の僥倖とによりて余は之を熟讀する愈々久しきに及び且つ深く之に意を留むることゝなれり。是に於て乎以爲らく他教の經典は單に教訓の集團たるに止まらずして、所々に道德的智慧の精妙なる片句を拾集するの原野となり。余は徐々として既でに其精神に入れり。而して此等の經典を以て人生を活動せしめ進で神的生命の域に至らしむるものとなすに至れり。是に於て余は之に刺戟せられ、之れに充たされ之れに動かされ、以て之を歡美し尊敬することゝなれり、そは經典の故鄕にありて其教養と感化とを受くる人々が大に其精神に同情を有するが如く、余も亦幾分か其の經典の精神に同情を表するに至りたればなり。

第三期は他教の經典を熟讀玩味して之に同情を表するに至りたる後再び自宗の經典に復り來れる時代なり。余が他教の經典を繙かざりし前の判斷は尙ほ依然として保持せられ確定せらるゝやう思はれたり。而して當時尙ほ猶太の經典は一切諸他の經典に優りて更に莊嚴、巨大、豐祐、深遠なるものと見えたりき。然るに余は他教の經典を讀みたるが爲め、經典を判定する準備となるべき利益を得たり――其利益は莫大なりき――又余は一切の經典中に活ける所の經典そのもの（即ち眞質）に同情を表することによりて、自宗の經典を愛する情の皷舞せられ又貴くせられしことを發見せり。

是に至りて第四期は來れり、此段階は伯希來經典の更に大なる榮光と宏大とを極めて高く又喜ばしく認知する時期なり。伯希來の經典たる獨り平原に孤立するにあらず、俱に天に貫く所の諸他の經典の尖頂上に高く聳ふるが故に、其榮光と宏大とを認識するは單に之を諸他の經典と比較するに依るにあらずして、專ら全體の榮光中に其特色を現はせるに依るものとす。而して伯希來經典の充溢せる光彩と尊嚴なる高調とは、

その他教の經典と交友たるに於て、地上到る所に聞ゆる一種の高尚なる詩歌中の最も崇高なる句節とも云ふべき宗教そのものを表示するによりて現はるゝに至れり。

保羅は云へり、『聖徒は世を判くべし』と、惟ふにこれ神聖、高尚、寛大、純直なる者及び純潔なる正義と眞實とを目的とする者が世界を審判することを云へるなり。蓋し理想は常に屈撓し、下降することなかるべく、世界の事物は靜立する能はずして動搖せざるべからず、理想は下降するものにあらざるが故に人は是非とも上昇せざるべからざるなり、人は向上進歩すべく、理想は天上に靜止して崇拜せらるべきは正にこれ理の當然なるを以てなり。

然るに何故聖徒は世を審判すべきか、換言せば善なるもの、眞なるもの、及び理想を破壞せざるものが世を指導し審判すとは如何なる意味ぞ。曰く、聖徒が世を審判すとの思想は實に高大なる思想なり。余は未だ嘗て之に優りて尚ほ宗教的なるもの、即ち之よりも更に深く人の性情と神の存在とに徹底せるものあるを知らず。聖徒の世を審判する所以は是れ世を達觀する者なるが故なり、即ち一の公正、純美にして崇拜すべき道を知りて、之に從はんことを眞實に願望するものは世を達觀して誤ることなきを以てなり。若し之を誤るものあらんか、これ其裡に情慾の混ずるあるによる。斯る人は理想に合致せんとして却て理想を減却し、損傷するものにして、半ば純正善良なる方法を取るに過ぎざるなり。されど人若し上述の如き道を發見し全力を盡して之に向はんか、時に應じて最善の方法を視るに誤ることなかるべし。第四福音者の記する所によれば耶蘇は其教説中の最も深邃なるものに於て之を言ひたりき、曰く『何人にても若し神の意をなさんと欲せば、其教義若くは教訓の何たるを知ることを得べし』と。これ聖徒の世を判く所以なり、そは其目的方法共に純潔にして即ち神意を行はんと欲するものならんか、これ彼等は豫言者にして耶蘇が云ひし如く、よく其方法を知り、又其教を知るものなればなり。

豫言者たるものは同一の事柄を見ざるべからず、そは彼等はたゞ見らるべきものを見而して之を如實に見るものなればなり。豫言者の云ふが如く、神は一にして永住不變なり。又他の所に於て言ふが如く『永遠より永遠に彼は神たるなり』。これ神聖、正義にして勝利を得べき道は永劫同一なることを意義するものたり。又或る使徒は他の句調を以て之を表はせり、曰く『神は變ずべきものにあらず、又變轉する蔭影の如き

ものにあらず』と。されば神の道を視る所の豫言者は悉く同様に見ざるべからず。彼等はその相距る幾千里なるも、又その時代を異にする幾千年なるも、同一の物を見、同一の事を語る、そは彼等が見る所は永久不變にして『變化すべきものにあらず、又變轉する蔭影の如きものにあらざる』を以てなり。されど聖徒にして若し常恒なるものに從はんことを欲せざらんか、決して斯の如きものを見ざるべし。若し彼等にして如何にせば時に臨みて些細なる事物に適應し得べきかに煩慮し、如何にせば一時の利益を獲る爲に少しく正道を曲け得るかを考慮し、又如何にせば利益と安逸を捕へんが爲め少しく眞の道をはなれ得るかを思慮するが如きことあらんか、彼等は到底世を審判すべき神の權能を有する所の唯一常恒の道たる正義、理想、眞理等を見ること能はざるべきなり。然れども若し彼等にして劣等なる事物に留意することなく、單に神聖眞實なる熱心を以て簡明なる正義を如實に見ることを得んか、これ彼等は同一の事柄を見、而して悉く同様に之を見、又常に同一の事を云ふものなり。

余は諸氏をして更に聖徒及び豫言者が同一の事柄を語りしこと、眞理を愛するものが凡て一たること、及び人の子の悉く神にありて一たることを知らしめんが爲め、異種の經典が載する所の聖徒及び豫言者の言を今諸氏の前に陳述すべし。

先づ戒慎に關する言を擧げん、そは吾人若し恩惠に沐浴するに至らんか、自ら戒慎する所なかるべからざるを以てなり。吾人は戒慎てふことに就て考ふるに當りて、聖徒及び豫言者の言中に如何なることを求むべきか。第一に吾人の期望すべきは神に對して、即ち理想と完全とに對して自ら戒慎せざるべからずとの思想なり。吾人は目的の神意に適ひ、又其方法をして此目的に適はしめんが爲に戒慎すべきものなり。人は悉く斯く思ふて、曰く、不正なる目的を立つるはこれ神と戰ふに外ならずと。されど又多くの人は言はん、目的は純潔完全ならざるべからずと雖、吾人の共に働くべき世界は正道を離れて邪岐に向ひ誘惑情慾、傲慢、及び無數の障害に滿てる所の憫むべき被造物に外ならざることを忘るべからずと。此種の人は斯の如き思想を有するが故に、この憫むべき被造物の同意を得て、善良なる目的に導かんが爲に、多少吾人の意を枉げ、手段を卑くして、凡俗の慢心と自利心とに投合せざるべからずとなす。然れども若し人の意を得んが爲に劣等なる動機と方法とに從はんか、これ變遷空虛なるものに信を得んが爲め完全無窮なるものを輕視するも可なりとなし、却て人を重んじ神を輕

侮するものにあらずして何ぞや。又吾人の聖徒と豫言者とに求むる所は彼等が吾人の他人に對して自ら戒慎せざるべからざることを云ふにあり。第一吾人の正しき判斷をなし得るに蓋し傲慢、凶暴、利己的なる判斷をなさざるにより、若し斯くの如くならんか決して正しき判斷はなし得られざるなり。耶蘇は之を次の如く云へり――我儕若し己れの目に梁木のあるを知らずして他人の目より物屑を除かんとせんか、到底能はざるは言ふまでもなく、その物屑を如實に見ることすら、なし得ざるべしと。而して第二に吾人は他人を助け得る爲に自ら戒慎せざるべからず。夫れ自ら己れを反省する能はずして如何てか他人を助くることを得んや。又自ら正道に立たずして如何てか他人を正道に導くことを得んや。

我儕が聖徒及び豫言者の言ふべき所と思へる上述の如き事を眞に彼等が言ひしことを諸氏に知らしめんが爲、余は茲に其數語を引照すべし。

佛典に曰く、『他人の罪を見るは易し、されど人若し之を搜索して過失を發見せば、己れの弱點は益々大なるべし』と。

孔子曰く、『其身を正うする能はず、人を正うするを如何』と。又曰く『賢を見ては齊しからんことを思ひ、不賢を見ては內に自ら省るなり』と。又曰く、『一日己に克て禮に復すれば天下仁に歸す』と。

ソクラテス曰く簡短、安全にして善良なる唯一の道は、我儕が善しとせられんと欲する所の事柄に於て、眞實に善ならんことを勵むにあり』と。又曰く『世人が德と稱するものは其何たるに拘はらず惡く勉學と練習とを以て得らるべし』と。

ゾロアスターの經典に曰く、『オー、神よ、我に此二つの願望――己を知り、己を糾すを與へよ。勉めて己れを守り、又己れに克つべし。然らば他人を敎へ又他人を從はしむることを得ん。そは己れに克つは至難の事たればなり』と。

耶蘇も亦之れと同じく云へり、曰く、『誘惑に陷らざるやう目を醒し且つ祈れ』と。

次に純善、潔白、敬神、無私等の如き吾人が品性と呼ぶ所の義務及び性向について言はん。吾人は神聖なる豫言者が此等の點について如何に言へりと思ふべきか。吾人は聖徒が永遠無窮に眞實なる所の理想上の事柄を語ることを期望す。彼等は斯る事柄を語るに當り先づ第一に云はん、報酬、賞讃、利益の爲ならずして、たゞ神の爲に神を望む所の善と純德とは、人間の思惟する一切の事物中の至要なるものなりと。豫言者

は云ふならん、宗教若くは人生に於てその貴重すべきものは純潔なる品性の貴重なるに勝るものなしと。而して第二に彼等は云はん、純潔なる品性は常に何人も之れを保ち得る所のものにして、他物《金銀財産》は却て常に保ち得る所にあらず、そは多く之を有する者と、少く之を有する者あるを以てなり。又他物には屢々消失損亡の起るあり、然れども眞正の善は人の常に之れを保ち得べきものにして是れ全く我等の努力如何にあり、何となればその力は遠く外にあるにあらずして近く内にあるを以てなりと。第三に吾人が豫言者の言に期する所は此の純潔なる品性は吾人をして確乎不拔有德の君子たらしむるに先づ必要なる數多の些少善事に向て忠信なるによりて吾人の内に成育するものなることを告ぐるにあり。夫れ善惡間の微細なる撰擇を反覆留意するは其生長極めて徐々なるが如くにして然かも迅速なる又肝要なる一切の言辭に超絶する所の吾人の德性を養成する所以なり。最後に吾人の豫言者の言に期する所は、吾人がこの忠信により心情の純潔と品性の堅固とに達するときに、その心眼は一切の神性、美麗、榮光、無窮を洞見するを得可べきことを云ふにあり。今茲に彼等は果して斯の如き事を言得るか否かを驗せんが爲め左に聖なる豫言者達の數語を引くべし。

佛典に曰く、『己れに克つは戰場に於て千回千人の敵を征服するよりも大なる征服にしてこれ凡ての戰勝中の最大なるものなり。惡を輕視する勿れ。滴々積りて甕を滿たす善を輕視する勿れ、賢者の純潔に滿たさるゝは滴々之を聚むるにあり』と。

ゾロアスター曰く、『至誠なる行爲を以て神を讃美せよ』と。

モーゼの律法に曰く『殺す勿れ、僞の證を立つる勿れ、貪る勿れ、盜む勿れ、神の名を瀆す勿れ、他人を苦しむる勿れ、己れの如く其隣人を愛せよ。汝の父と母とを敬へ。白頭の前に立ち、老人の顏を敬へ、又汝の神を畏れよ』と。

耶蘇も同じ目的を以て云へり。曰く『餓渴ごとく義を慕ふ者は福なり、其人は義に他くことを得べければなり。心の清き者は幸なり、其人は神を見ることを得べければなり』と。

次に余は愛の思想と美質とについて云はん。此事に關して吾人は如何なることを豫言者の言に期すべきか聖なる豫言者は第一に言はん、愛は一切の能力中の最大なるものなり、愛の力は萬能に等し、若し一瞬間たりとも愛なからんか、他人は其心に影響を感ぜざるに係らず、吾人は其事業と勤勞との上に自ら虛弱なるを覺ゆ、況んや永久愛

なき（若し斯ることありと想像し得とせば）に於てをやと。次に吾人は豫言者の言に期す曰く怨恨を以て怨恨に報ゆるが如く愛は決して我儕の内に滅息すべきものにあらず、却て怨恨に酬るに愛を以てし、怒に臨むに平和を以てし、諸悪に酬ゆるに諸善を以てすべしと。又期す豫言者の言は斯くあらん事を、曰く、吾人の内なる純正善良なる愛及び愛の偉大なることを熱誠と又愛の廣域は皆なこれ吾人に神に密接合一せしむるものたり、そは神は無限の愛なればなりと。豫言者は果して斯の如きことを語るか。之を明かにせんが爲め次に豫言者の數語を述べん。

ゾロアスターの經典に曰く、『我儕をして來世の生活に於ても互に相助くるが如きものたらしめよ』と。

孔子曰く、『人の善を道ふを樂べ。己れの欲せざる所を人に施す勿れ。近き者悅び遠き者來る』と。

佛典は敎へて曰く、『若し人を憎むものあらば、既に怨恨を脫したる人のうちに居れ。愛を以て怒に勝ち、善を以て惡に勝ち、寛大を以て利己に勝ち、眞實を以て虛僞に勝つべし。そは憤怒は何れの時に於ても憤怒にありて靜めらるゝものにあらざればなり

怒は愛によりて靜止す――これ永遠不變の定律たり。人若し無限にして公正なる善意を有せんか、居常必ず此言に適中すべし。斯る人の心意は神聖の居宅たるを以てなり』と。

耶蘇曰く『矜恤あるものは福なり其人は矜恤を得べければなり。和平を求むるものは福なり其人は神の子と稱へらるべければなり』と。

次に純朴と謙讓との德についていはん。吾人は聖なる敎師達が此等の德について如何なる事を云ふと思ふべきか。第一に彼等は言ふならん、吾人は他人に求むるよりも多く己に求めざるべからずと。若し心を純朴にし謙遜にせんか、吾人は常に他人に向て求むる所あらざるべし。――加之、寧ろ與へらるゝ所を極めて感謝して受け、之を己れの受くべき境遇よりも優れりとなし然かも他に與へんが爲め自ら己れに要求する所には尙ほ足らずとなす。余は何を以て要求と云ふか、そは吾人にして若し純朴謙讓の心あらんか、即ち吾人は萬有の溢出物にしてたゞ之を樂む外決して思ふ所なかるべし。次に豫言者は言ふならん、純朴と謙遜とは殊に虛心なる幼年の美質にして、純朴なる幼兒の美麗と柔和と温柔とに類す。而して此美質が中年にまで繼續し幼兒の純朴

が大人の智識と結合し尙ほ老後白頭上の玉冠たるに至らば、これ美中の美たるべしと。又豫言者は云はん、精神の謙遜と純朴とは莫大なる能力を有す、此等の美質は愛の如き力を有す、恐らく愛の一部たるべし、そは純朴謙讓ならざりし所の愛は未だ曾て之れあらざるを以てなりと。斯の如くなるを以て最後に勝利を得るものは溫柔、耐忍純朴なる眞の勇者なり。此等の點について今試に聖なる敎師達の言ふ所に耳を傾けよ。

孔子曰く、『躬自ら厚うして、薄く人を責むれば則ち怨に遠かる。君子は諸を己れに求む小人は諸を人に求む』と。

孟子曰く『君子は其幼心を失はず』と。

ソクラテス曰く『勉めて要求を減ずるは最も神に近づくの道なり』と。

耶蘇も亦同樣に之を云へり、曰く『嬰兒の如く天國を受くるものにあらざれば天國に入るを得じ。柔和なる者は福なり其人は地を嗣ぐことを得べければなり。心の貧しき者は福なり天國は即ち其人の有なればなり』と。

次に應報の原理と事實とを說かん。應報の確實なることに關しては豫言者は確かに斯く言ふならん。曰く、善事に敵するものは善事を打破せんとして却て自ら倒るべし我儕の罪は我儕を見出すべし、否な既に我濟を見出せり、夫れ罪は我儕を尋ぬるにあらず常に我儕と共にありき。又我儕に隱るゝことなく、我儕をして己れより匿るゝを許さじと。又彼等は云はん、應報の定律は一切諸物に定まれり、地上に於ても、水中に於ても、空中に於ても、又我儕の身體に於ても定まれり。而して一切の諸物は惡行を罰せん爲に湊合せり、罪惡は決して天誅を遁れ得るものに非す、又如何にすとも自ら蓋ひ匿るべからず、そは罪惡に刑罰の附隨するは一切諸物の定律と性情とによりて定まれる運命なればなりと。或は曰ん假令罪を罰する一切の要素は苦痛、虛弱、疾病、損失、死等を以て集合するも、或は永久の攝理は如何に邪惡不正を審判するも、尙ほ之に超過する所の重罰は惡行その物の裡に在り。そは惡行は惡なるが爲に苦むよりも更に惡しく、最大苛重の刑罰とは罰せらるべき事其のものなればなり。而して此眞理は假令遲延するにもせよ、遂に我儕の頭上に輝き、我儕をして耻辱の焔火に絕叫せしむるに至るなりと。今余は佛典中より應報に關する豫言者の言を少しく述べん。曰く『何人も有し得る財寶あり、是れ即ち心情、愛、廉節のうちに蓄へ

らるゝ財寶にして。何人も之を奪去ること能はざるなり。されど罪は風に向ひて投げられたる微塵の如くに我儕に歸り來るべし。天上にも海原にも深山絶壁にも己れの惡行より遁れ得る場所あるを知らず。そは惡は恰かも燃ゆる火の如く己れの行によりて燃ゆるものなればなり。されど自ら惡をなさゞるものに惡あることなし。假令鬼神の力と雖、人の己れに勝ちたる勝利を變じて敗北となす能はず。磐石の風に搖かされざるが如く、善行は世の毀譽褒貶によりて動搖するものにあらざるなり』と。

少くとも吾人若し一の高大なる理想を以て他の思想よりも一層密接なる關係を宗教に有せりとせば尙ほ宗教の心髓に接近する所の諸問題を擧ぐることを得べし。これ即ち神及び攝理に關する思想なり。吾人は聖なる教師及び豫言者達が此思想について如何なるとを云へりと所期するか洪繁なる諸聖典に現われたる聖訓を今一々列擧するを得る所にあらざれば、余はたゞ二三の事柄について云はんのみ、そは吾人が神とその攝理とに關して有し得る一切の思想は約するに此の二三の最大にして榮光ある思想中に集合すべければなり、然り而して此思想たるや恰かも大洋が凡ての河流を容るゝが如く一切諸他の思想を保持して之を包含する者たればなり。第一吾人は豫言者の言を期

す、曰く吾人に現はれ一切諸物の中に活ける神の性情として現れたる無限にして神聖なる秩序について語ることを。彼等は、曰はん抑も萬物に一貫せるものあり、大は大空の星宿より小は一水滴に至るまで、下は野獸の愛情と苦痛より上は聖賢の祈禱と悲痛に至るまで、悉く全一たるものなること是れなり。彼等は吾人に語るならん、一切を貫きて一の思想、一の生命、一の愛、一の法則行はれ、決して盡くることなく、變ずることなく、侵さるゝことなく、破らるゝことなく、妨げらるゝことなく常に全能にして、正義を建立しつゝあるものなりと。又聖なる豫言者は言はん。吾人は何を以て神を畏るゝか、神は毫も畏る可きの理由あることなしと答へん。蓋し吾人の神を畏るべきものとなさゞる理由は神の一切の能力は善をなすものたるに外ならず、又その永遠の榮光は洪大無量の恩惠を以て萬象を守護するに外ならざればなり。然り而して吾人若し神を畏るゝことなくして之を信じ、之に依賴し、祈禱し、感謝すとせば將又何の恐るべきものある乎。神を恐る可き者に非ずとせば天地間一物として恐るべきものなきは實に明白なる事實なり、そは諸物は悉く神の手中にあるものなればなり。又聖なる教師は吾人に語りて言ふならん、神は遠方より證明によりて論議せられ、推理

せられ、間接に追求せらるべきものにあらず、近く我儕の周圍に於て直接に見聞せらるゝものなり、而して神の如くによく見られよく知らるゝものは天地間未だ曾つてあることなし、人は己れを見るに於てすら斯の如く分明なる能はざるなり、そは人は神の生命の裡にあるものなればなりと。然り而して豫言者は言はん、神は吾人に現はる故に吾人は萬有の一切の榮光に於てその顏を見、空中の諸の音響就中人の音聲に於て尙ほ人の音聲中最も多く愛と希望と感謝との滿つる音聲に於て、此の肉片耳を以て神の聲と談話とを聞くものなりと。今余は此思想に關して聖なる敎師の言ふ所を少しく述べん。

ソクラテス曰く『此世に於てよく其身體を律し、智識を樂しみたる人をしてその靈魂について、樂ましめよ。又靈魂自身の寶玉たる廉節、正義、勇氣、尊嚴、眞實等を以て靈魂を飾りたる人をして同上の樂を持たしめよ。靈魂は此等のものに修飾せられ、時到らば他の世界に旅立する準備をなせるものなり。若し死は他の場所即ち一切の死者が住する場所に赴くべき旅行ならんには之に優る所の善事何かあらん。死を樂め、善人には今生に於てもまた死後に於ても悪の來ることなしとの眞理について死の何たるを知れ。神は全宇宙を統轄し總攝す、萬物そのうちに在て美且つ善なり。神は宇宙を守りて障害、混亂、敗壞なからしむ、宇宙が神の法則に從ふや人間の思想よりも迅速に、而かも其秩序整然たり』と。

ゾロアスターの經典に曰く『余が讃美を以て崇敬する所のものを今目前見、之を善心、善語、善行の實體たる神と認知す』と。

耶蘇も亦同樣の言をなせり、曰く『二羽の雀は一錢にて售るにあらずや、然るに爾曹の父の許なくば其一羽も地に隕つることなし。（中略）故に懼るゝ勿れ。その時言ふべき事は爾曹に賜はるべし、是爾曹自ら言ふにあらず爾曹の父の靈その衷にありて言ふなり』と。

吾人は今世界諸宗敎の全體を總攬して論ずるを得べし、而して凡ての宗敎に於て一種の心靈的要素、光明に達せんとする一種の欲望、言語の表はし得ざる名稱の單語或は少くとも之を綴らんとする一種の企圖の存することを發見するならん。一切の宗敎は希望を有し、又倫理的若くは道德的方面より見れば、自由に受納するを得べき一種の感化力を有す。任他遇まその遵奉者を自由にし神聖にするとなき場合ありとするも、

之を高上せしめ之を進歩せしむるに恰當なる力あるべし、ホーメルは適切に之を言へり、曰く『凡ての人は神を熱望す』と。マックス、ミューレルは曰く『吾人若し注意して耳を傾くることだになさば、吾人は凡ての宗教に於て心靈の呻聲、不可思議なるものを思議し言説すべからざる者を言説せんとする辛勞、無限なる者の追求。神の愛等の聲を聞き得るなり』と。セイント、オーガスチンは曰く『眞理の粒末を有せざる宗教は世に決して之れあることなし』と。マックス、ミューレルも亦曰く『善をなせ惡を避けよと教へざる宗教は未だ曾てあることなし、假令之ありとするも余は之を知らざるなり』と。

我儕に聖徒を與へし神に感謝を奉れ、智慧を與ふるものに感謝を奉れ。これ凡ての時代に於て聖なる心靈に透徹し心靈をして神及び豫言者の友たらしむるものたればなり。

我儕に理想を示して之を進ましめんとし、我儕をして墮落せしめず、我儕の過失すらも看過せず、我儕の心靈をして光明の道に進ましめ、夜は如何に暗黑たるも常に我儕をして光明を見せしめんとする者あるを知らは如何に幸なる者なる乎。我儕をして賤劣なる目的に向はしめず、常に最高の目的に向て確立せしめんとし、又此最高なる目的を達するに最高なる道を擇ぶの外決して他の道を取ることを許さゞる所の聖賢豫言者達のあるを知らば如何に幸なる者なる乎。これ賤しき動機に屈せず、傲慢、利益、偏見、黨派、怨恨、其他一切の卑陋なることを求めず常にたゞ神の愛と平和とに依りて神の眞理を求むる人々の受く可き最大幸福なり。

我儕をして古への聖賢豫言者達の爲に感謝を奉らしめよ。そは彼等は地上至る所に遍在するものなればなり。若し我儕にのみ斯る教師ありて他人になしとせば如何に悲しきことならずや。若し吾人の國語に於てのみ其聖なる訓戒は發音せられ、その他の國語に於ては語られずとせば如何に歎ずべきことならずや。而して我儕と同一ならざる教師を有する凡ての人間は其靈魂に熱心と純潔なる榮光とを與ふる他種の教師を有せずとせば如何に哀しからずや。然るに斯の如くならざるは、これ歡喜し、拜謝し、讃美し、謳歌し、祝賀し、奏樂して喜ぶ人生の幸福ならずや。何れの人種國民と雖、神の證明なき者はあらず。如何なる國語と雖、經典を有せざるものはあらず。我儕は信ず、此の廣漠無邊の全宇宙間何れの世界と雖、廣義に於ける基督なく又眞正なる宗教

的默示を載する聖典なきものはあらざれば。其の心髓より發出する歡喜感謝、讃美奏樂なくして可ならんや。

明治四十二年八月十八日印刷
明治四十二年八月二十二日發行

翻譯兼發行者　東京市芝區三田綱町四番地　神田佐一郎

印刷人　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎

印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍

發行所　東京市三田四國町二番地六號　日本ユニテリアン弘道會

259
522